書　評　と　紹　介

湯澤規子著

『焼き芋とドーナツ
——日米シスターフッド交流秘史』

評者：佐藤　千登勢

本書は，19 世紀から 20 世紀初頭の日本とアメリカ合衆国（以下，アメリカ）における女性たちの労働と生活をさまざまな角度から考察することによって，働く女性の歴史的な経験を再検討することを試みている。著者によると，細井和喜蔵の『女工哀史』に代表されるような，マスター・ナラティブとして受け入れられてきた作品からは，働く女性たちの現実を知ることはできないという。彼女たちの声なき声に耳を傾けることによってはじめて，働く女性が自らの経験をどのように認識し，ひとりの人間としていかに主体性を獲得しえたのかという問題を論ずることが可能になるのであり，それは，「当事者の歴史観」に迫ることにつながる。また，女性たちの多声的な「小さな物語」を理解するにあたって，労働や生活といった括りも再考されなければならない。生活していく上で必要であるが，家事という範疇から漏れてしまうような物事にも目を向け，女性たちの「日常茶飯という世界」を見ていくことが重要であると著者は考えている。

本書は 8 章から成り立っており，第 1 部が日本の女性に関する 4 つの章，第 2 部がアメリカの女性について検討した 4 つの章で構成されている。まず，各章の内容を簡単に述べておきたい。

第一章「糸と饅頭——ある紡績女工のライフヒストリー」では，今から約 1 世紀前に出版された細井和喜蔵の『女工哀史』 に対して著者がこれまで抱いてきた一種の「違和感」について検討されている。著者によると，『女工哀史』には，実在する固有の個人としての女性はほとんど登場せず，人間の具体的な生活世界が描かれていない。一方，細井の内縁の妻で同書の執筆に協力した高井としをの語りをもとに，1970 年代に世に出された『わたしの「女工哀史」』は，としをの亀戸の工場での経験を中心に，全く異なる視点から女工たちの生活世界を描いている。著者は，「推論の域を出ない」としながらも，当時の女性たちは，男性から自らの存在が認められないことに失望していたのではないかという。こうした女工の不可視化は，その後の歴史研究にも受け継がれており，現在の私たちの認識にも強い影響を及ぼしている。

第二章「焼き芋と胃袋——女工たちの身体と人格」では，働く女性にとって，現金を稼ぐことが，自らの力で人生を切り拓くための重要な一歩であったことが論じられている。特に，自分のお金で胃袋を満たすことの意義が述べられており，なかでも，焼き芋は単なる間食や嗜好品を越えて，女工たちが自由に外出して小遣いで買い物ができる喜びを象徴する食べものであったという。それは，ささやかな抵抗のシンボルでもあった。女工たちが働く工場では，明治 20 年代以降，寄宿制への転換が進み，経営は，働く者の身体と生活への関与を深めた。経

営者の間には，対極的な女工観が見られ，鐘淵紡績の武藤山治は，経営家族主義をとり，温情主義的な女工の管理を行ったが，倉敷紡績の大原孫三郎は，一人前の人間として女工を扱い，「人格向上主義」を唱えて先駆的な経営を進めた。

第三章「米と潮騒——100年前の米騒動と女性の自治」では，1918年に魚津で起こった米騒動に関して，近年進められている再解釈について論じられている。それは，米騒動を民衆の暴動とする見方を問い直し，貧民救済制度の発動を求めたデモンストレーションとして捉え直すものである。著者は，魚津の女性たちの言葉と行動に着目し，米騒動は，日常茶飯の関心事に基づいた女性たちによる嘆願であったとしている。だがその後，米騒動が都市へ波及すると，男性の都市労働者の言葉で語られる出来事へと変換していった。こうした変化を，著者は「潮騒」のような動きが，「劇場」へと舞台を移すようなものだったと表現している。それはまた，日常茶飯の「小さな歴史」が，「大きな歴史」に回収されていくことを意味しており，それによって，米騒動は「語ってはいけない歴史」というスティグマを刻印されてしまったという。

第四章「月とクリームパン——近代の夜明けと新しき女たち」では，高井としをに加えて，伊藤野枝，相馬黒光が，3人の「新しき女」として取り上げられている。なかでも，明治女学校を卒業後，中村屋の女将となり商売で成功した黒光の生涯が詳述され，このような女性は，当時の日本では例外的な存在であったことが論じられている。また，アメリカとは異なり，日本では女性労働者の活動が単発的なストライキにとどまったことが指摘され，その原因として，家父長的な労務管理体制が確立されたことと，新たな女子教育が挫折したことがあげられている。日本でも，1915年と16年に渡米し，『友愛婦人』を発刊した鈴木文治のような労働運動の指導者が，女性も含めた「人格の向上」を唱えてはいたが，そうした主張は例外的なものであり，女性労働者が主体性を持つことは困難を極めた。

第五章「野ぶどうとペン——女性作家の誕生」では，19世紀後半のアメリカにおける高等教育と女性について考察している。生物学を志した津田梅子が二度目の留学時に在籍したウッズホールの海洋生物学研究所などの例を見ると，女性に対する高等教育機関の門戸開放には日米で100年の隔たりがあった。さらに，19世紀のアメリカで文学作品を通じて，女性が自立して生きることの意味を説いた2人の女性作家——フランシス・ホジソン・バーネットとルイーザ・メイ・オールコット——を取り上げている。これらの女性作家による著作は，結婚しても家庭に縛られない女性の新しい生き方を描いており，経済的な手段だけでなく，仕事から女性は自立や学びの喜びを得られることを説くと同時に，女性同士が連帯しシスターフッドを培うことの重要性を訴えていた。

第六章「パンと綿布——ローウェルの女工たち」は，アメリカが産業革命を迎えた時代に，マサチューセッツ州で紡績業に従事した若い女性たちの労働と生活について詳述している。彼女たちは農村を離れ，企業が設立した寄宿舎に住み込み，過酷な労働に耐えながら，経済的な自立とともに働くことの意義や喜びを生活の中に見い出していた。工場での勤務の合間に文芸活動にいそしむものもおり，詩やエッセイを書き，作品を会社の文芸誌『ローウェル・オファリング』に投稿した。ここでは，2人の著名な書き手——ハリエット・H・ロビンソンとルーシー・ラーコム——のライフヒストリーが語られ，「織機の間の知性」が育まれた当時の状況が明らかにされている。こうした生活を通して，ローウェルの女工たちは「自己修練」を行

い，「わたし」，「わたしたち」という主語を明確に持つ存在になっていった。

第七章「キルトと蜂蜜――針と糸で発言する女性たち」では，パッチワークキルトがアメリカの女性たちのライフステージを彩り，生涯を儀式化し，個人に尊厳を与える象徴としての役割を果たしてきたことが論じられている。アメリカ人の女性はキルトを通じて，社会的・経済的・政治的な発言や意思の表明をすることもあった。例えばアルコール依存者撲滅の請願や，禁酒運動や黒人奴隷解放運動，女性参政権運動の旗印にキルトが用いられた。家庭での女性の手仕事でありながら，キルトを通じてアメリカの女性たちは，「わたし」，「わたしたち」という主体性を針と糸で表現することができた。西部の開拓地で見られたように，キルトは多くの女性の手によって作られ，女性たちの相互扶助組織やネットワークの形成にも大きな役割を果たした。

第八章「ドーナツと胃袋――台所と学びとシスターフッド」は，家政学の先駆者であるエレン・スワロウ・リチャーズについて詳述している。エレンは，父が営む雑貨店で見つけた，日常茶飯に埋め込まれた化学の知識に魅了され，バッサー大学を経て，1870 年に特別学生としてマサチューセッツ工科大学（MIT）に入学を許された。その後，消費者家庭試験研究所を設立し，家庭化学という新しい学問分野を開拓した。エレンは，科学的な知識を用いて家事負担を軽減することを目指し，女性に健康で創造的な天分を発揮する機会を与えようとした。大都市で移民が急増すると，劣悪な生活環境や栄養状態を改善するために，さまざまな調査がなされ，ニューイングランド・キッチンなどに，エレンの影響が見られた。

このように本書は多岐にわたるテーマを取り上げ，さまざまな史料を引用しながら，日米の女性のライフヒストリーを活写し，女性たちが生きた足跡をよみがえらせている。ひとつのテーマを一次史料に基づいて深く掘り下げた研究書とはまた違う性格の書籍となっているが，日米の女性の生活世界を理解する上で重要なテーマをひとつひとつ丁寧な筆致で論じており，多くの読者を魅了するに十分な内容となっている。

本書の魅力のひとつは，その題目と各章のタイトルにちりばめられている，焼き芋，饅頭，米，クリームパン，野ぶどう，パン，蜂蜜，ドーナツといった食べ物の数々であり，働く女性と食をめぐる出来事がいくつも取り上げられている。東京モスリンの女工たちがストライキの決起集会に際して，食事という日常茶飯について問題提起をしたことや，女工たちにとって工場生活での食事は，胃袋を通じて集団の中で自分の居場所を確認するすべであったこと。また，アメリカでは，ボストンで女性によって「働く女性たちの胃袋調査」が行われ，いわゆる「パン屋もの」が多く食されていることがわかり，食生活を改善するためにニューイングランド・キッチンが登場したことなどが論じられている。ただし本書では，焼き芋やドーナツのような「食と食とのあいだ」を埋める嗜好品について，個別に具体的な考察がなされているわけではないため，題目やタイトルから，女性の労働と食文化に関する話を期待した読者は，少し消化不良を感じるかもしれない。

また，サブタイトルにある「日米シスターフッド交流史」についても，若干のコメントが必要であろう。本書で日米の女性の交流として述べられているのは，主として津田梅子や山川捨松らのアメリカ留学である。彼女たちの最初の渡米は 1871 年であり，新しい女子教育の種が日本に蒔かれた時代だった。アメリカでは同年，エレン・スワロウ・リチャーズが MIT に

入学しており，高等教育の扉が女性に対して開かれつつあった。しかし，梅子が帰国した1882年には，すでに日本では近代的な女子教育への熱意が冷めており，アメリカで教育を受けた女性の活躍の場は大きく狭められた。著者は，日本で新しい女子教育の発展が頓挫した理由として，「森有礼の早すぎる死」をあげている。こうした説明は，一般的にも受け入れられているものであるが，日本の女子教育の「挫折」が本書の重要なテーマであるのならば，政党政治の変容やイデオロギーの保守化など，より広い観点からさらに考察を深める必要があったのではないかと思われる。

さらに著者は，日本で始まった女性を主体とする活動は，ささやかで緩慢なものに終わってしまう傾向が強かったことを本書の中で何度か指摘している。ここで比較の対象とされているのは，アメリカで多くの女性が参加した黒人奴隷解放運動や禁酒運動，女性参政権運動，全国女性労働組合連盟の設立，女性教育・産業連合（WEIU）による活動などであり，なぜ日本ではアメリカと異なり，女性たちの「自治権」が小さなものにとどまったのかと問うている。その答えとして，日本の女性たちが「わたし」という主語を喪失してしまったことをあげ，それは新しい女子教育の挫折と密接に関連していると捉えている。この点に関しては，19世紀から20世紀初頭のアメリカにおいても，高等教育を受けて「主体性」を獲得することができたのは，白人中産階級のごく一部の女性だったことを忘れてはならない。アメリカでも南北戦争以前は，「家庭崇拝」のイデオロギーが根強く社会に定着し，19世紀半ば以降も，男女の領域は完全に分離されるべきであり，家庭に帰属する女性は社会的・政治的な関心を持つべきではないという言説が広く受け入れられていた。こうした多くのアメリカ人女性が置かれていた歴史的な状況について，もう少し詳しい説明があってもよかったのではないか。

本書の最後で述べられている「女性たちの対岸」は，たいへん重要な論点であり，特にアメリカの女性史では，人種・エスニシティによる女性の分断やシスターフッドを築くことの難しさがここに集約される。第六章で取り上げられているローウェルの女工たちは，黒人奴隷制廃止運動に関心を向け，南部の奴隷女性たちの生に思いを馳せる心を持っていたと述べられている。しかし，同時に彼女たちは，ストライキに際して，私たちは「白人奴隷」，「賃金奴隷」ではないと主張するなど，白人優越主義的なレトリックを用いており，人種の境界線を明確に意識していた。さらに，第八章で述べられているWEIUによるニューイングランド・キッチンがそれほど普及しなかった理由についても，「女性たちの対岸」が深く関係しているように思われる。すなわち，WEIUの女性たちは，貧しい女性労働者や移民女性を支援する目的でこうした活動を実践したが，支援の対象となった女性たちは，白人中産階級的な規範や価値観に基づいて提供されるサービスを，上からの目線でなされる啓蒙や指導のように感じ，キッチンを手放しで歓迎しなかったのではないだろうか。このように人種・エスニシティや階級などの差異が，女性の中に「対岸」を作り出し，シスターフッドにほころびを作ってしまう出来事は，歴史の中で何度も繰り返されてきた。しかし，そのほころびを繕う努力が脈々と続けられてきたのも事実であり，そうした女性たちの活動が日本でもアメリカでも社会を少しずつ動かしてきたことを，本書は私たちに気づかせてくれる。

（湯澤規子著『焼き芋とドーナツ――日米シスターフッド交流秘史』KADOKAWA, 2023年9月，364頁，定価2,200円＋税）

（さとう・ちとせ　筑波大学人文社会系教授）